

## 稲垣良典先生のご逝去を悼む

---

上 枝 美 典

稲垣良典先生は今年1月15日にご逝去された。93才であった。あらためてご紹介するまでもなく長きにわたり日本の中世思想研究を牽引し支えてこられた、まさに泰斗と呼ぶに相応しい方であった。中世哲学会との関係においては第四代の会長（当時の呼称は委員長）を1987年から1993年まで、また編集委員を20年以上にわたって務められるなど、本学会の発展のために尽力された。

本稿の後に掲載される「主要業績一覧」を見れば明らかなおおり、稲垣先生のお仕事の量は超人的である。学術論文はもちろんのこと単著や翻訳がほとんど毎年のように発表され出版された。中世哲学、とくにトマス・アクィナスに興味を持つ日本の研究者たちの中で、陰に陽に強い影響を受けてこなかった者はいないだろう。

最近では、創文社の『トマス・アクィナス 神學大全』全訳達成のニュースの中で、その中心となった翻訳者として脚光を浴び、また、それに関連して『神学大全』やトマスについての啓蒙的な著作を数多く出版されたので、若い方々の中には稲垣先生に対して、トマス・アクィナスの翻訳者、そうでなくてもトマスに忠実な紹介者というイメージを持つ方がいるかもしれない。しかしそれは誤解である。

いつのことだったか、稲垣先生が何かの機会に、自分はこれまで長年の間、自分独自の哲学を構築すべく哲学的探究に専心してきた、という内容のことを話されたことがあった。このエピソードが示すとおり、稲垣先生はたんなる研究者ましてや翻訳者ではなく、あくまでもご自身の哲学的な問題意識を強く持ち、その中で、トマスその他の中世思想、そ

してイギリス経験論やカントをはじめとする西洋哲学の諸思想との絶えざる対話の中で、あくまでもこの世界の真理を探究する独立した哲学者であった。

1981年に出版された『習慣の哲学』は、「習慣」という、経験主義哲学を経て現代アメリカのプラグマティズムでも重視される概念に、トマスのハビトゥス論から光を当てることによって中世哲学の現代的意義を多方面から浮き彫りにすると同時に、現代の哲学が中世哲学研究にもたらす豊かな恩恵を多くの事例によって明らかにした快著である。この書に接して、哲学者、稲垣良典の存在を意識した方も多いのではないだろうか。この時点での稲垣先生の思索のキーワードは「経験」であり「習慣」である。神学の中に哲学を求めて思考する人間が発発すべき場所は、何よりも私たちが日々の生活の中で実感している生々しい経験であり、その立場から考えたとき、人間にとって真に重要なのは本質や本性ではなく（トマスの拡張された意味での）習慣である。デューイやパースなど20世紀のアメリカ哲学は明示的にそれを論じているし、この意味での「経験」の重視は、現象学をはじめとする現代の大陸哲学とも共通する要素である。稲垣先生はそのような時代の潮流の中に自らを置き、大きな哲学史の流れの一部として、現代哲学の一端を担うご自身の思索を探究されていた。

このような探究のありかたは、第二の主著とも言える『抽象と直観』（1991年）においてさらに迫力を増し、そこではウィリアム・オッカムの認識論の解明に照準を合わせ、この世界の中にそもそも「知」や「認識」というものが成立してしまっているという哲学的驚異に対するアプローチの仕方や問題の立て方が、14世紀のオッカムにおいて哲学史上画期的に変化したことが、膨大な資料の裏付けによって説得的に語られる。近代哲学、そしてそれにつながる現代の私たちは、基本的にこのオッカムが描いた図式の中に飲み込まれているのであり、トマスと私たちの間には大きな断絶がある。その断絶を引き起こしたのは、稲垣先生がよく使った表現を借用すれば「形而上学の排除」であり、オッカムはトマスにおいて当然とされていた形而上学的な枠組みを無視というしかたで排除することによって、哲学の流れを変えてしまった。逆に言えば、現代の私たちがトマス（とトマス以前）の哲学を理解するためには、

まずオッカムによって排除された「形而上学的な」視点を再建しなければならぬ、というのが稲垣先生の変わらない主張であった。

この「習慣」と「形而上学」という二つの視点とは、晩年の『人格《ペルソナ》の哲学』(2009年)においていわば合流し、自己愛が、愛徳によって捉え直されることによって、逆説的に、自己を与えつくす他者との交わりへと劇的に展開するという、「(習慣としての)人格」経験のダイナミズムが、淡々とした筆致の中に、近現代の「(習慣ならざる)人格」理解への痛烈な批判を交えつつ感動的に描き出されている。

あらためて思えば、稲垣先生は「形而上学」や「形而上学的」という言葉をよく使っていたと思う。私はいつも、稲垣先生がこの言葉を使うたびに、なんとなくわかったようなわからないような、もやもやとした気分になった。いつか教えてもらおうと思いつつながら怠惰を重ねるうちに、それを直接うかがう機会はずいぶん失われてしまった。少しは分かるような気もするが(たぶんそれはエッセと深く関係しているだろう)、しかしやっぱりよくわからない。正直なところ大きな宿題を抱えて途方に暮れる子供のような気分である。

普段の稲垣先生には、模範的な紳士というイメージがあった。学会などでお会いした時も、いつも微笑んでけっして声を荒げず、武道の達人のような静けさをまとって穏やかに話をされた。しかし他方で、お書きになる文章からは、時として正反対とも言えるような印象を受けることがあった。それは日本の中世哲学研究を西洋のレベルに引き上げたいという強い思いの表れであったようにも思う。稲垣先生は若くしてアメリカ・カトリック大学に留学して学位を取っておられるが、その稲垣先生が、四年間の留学を終えた翌年に開かれた本学会の研究大会で、山田晶先生の発表に「かなりきつい調子で異議を申し立てる質問」をしてしまい、後に松本正夫先生からたしなめられたというエピソードを、山田先生の追悼文の中で、まるで大切な思い出のようにお書きになっている(第51号)。私自身は、このように少しでも攻撃的な稲垣先生を実際に拝見したことがないが、しかし、穏やかな外見の中にもこんな燃えるような迫力は、確かに感じる事ができた。

私がかつて福岡に住んでいたとき、宗像のご自宅での「トマス研究会」に何度かお邪魔させていただく機会があった。親しいお弟子さんた

ちに囲まれて、静かにトマスのテキストを読み、淡々とコメントをしていくご様子は、学生の頃に集中講義でいらっしゃった授業の雰囲気そのままだった。そういえば、私は稲垣先生が京都大学に集中講義にいらっしゃるたびに欠かさず出席したが、あるとき不覚にも、教卓の目の前の席で居眠りをしてしまい、稲垣先生に頭を小突かれた記憶がある。しかしあの温厚な稲垣先生がそんなことをするだろうか、もしかするとそれは夢の一部だったのかもしれないと思ったりする一方で、渾身の思索を披露しているときに船をこいでいるような輩を、稲垣先生は本心から許すことができなかつたのかもしれない。そう思うと本当に自分が情けなく、申し訳ない気分一杯になるが、私の目蓋に浮かぶ稲垣先生はいつも穏やかに微笑んでいて、すべてを許してくださっているかのようなのである。

わが国の中世哲学研究に与えてくださった、かけがえのない大きな贈り物に感謝するとともに、稲垣良典先生のご逝去に心より哀悼の意を表したい。